

事故は不幸であったが．．．

畠中 幹夫

私が事故を知ったのは、12月24日の出勤直後の午前8時半だった。その日はクリスマスイブということもあり、5歳になる娘の枕元におくプレゼントやケーキのことがあたまの片隅にあったのだが、電話で一報を受け、事故現場を見た瞬間そんなことは吹っ飛んでしまった。図書館の床すべてが水浸し、地下書庫にも水が流入している。とんでもないことになったことはすぐに理解できた。

会計職員である私たちが、これからすべきことは、一瞬にして膨大な量になった。水道業者との対応、事故の記録・報告、水損図書に関する各種業者との調整・交渉、エレベータなどの点検など、どの仕事に関しても早急に対応しないといけないことばかりだ。しかも運が悪いことに、その日は、年末の週末であり、業者との調整にはあまり都合のよい日ではなかった。しかしながら、流ちょうに考えている暇さえなく、直面した事態に対して現状での最善の対応策を探り、進めていくしか方法はなく、とにかく必死だった。今から思えば、事故当時は最善だと思って進めたことであったとしても、顧みてみると必ずしもそうではなかったこともあると思う。

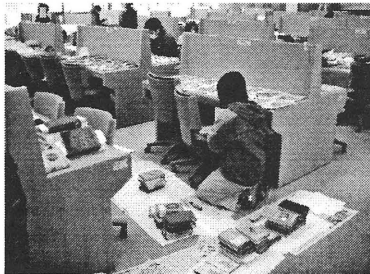
今回の事故は、不幸なことではあったが、不幸なことというだけで終わらせてはならない。起こったことは仕方がないが、今回の事故は、その後の処置の大切さや未然防止の大切さを教えてくれた。また、非常事態になったときに組織として大切なのは、リーダーシップを発揮できる人の存在であり、各々の職員がやるべき分担を自分で自覚し、コミュニケーションをとりながら事態に対処することであることも教えてくれた。今回の場合、福井事務長が指揮をとり、図書館職員は図書の保護、会計職員は業者との調整、そして全職員による水道水の館内除去などやるべき人がやるべきことをした結果として、何とか被害を最小限に抑えたことにつながったと思う。

今この原稿を書いているのが2月20日であるが、すでにあの事故から2ヶ月近い時間が経過している。今こうして原稿を書いている間も時間が刻々と進

行し、事故に対する記憶の風化は進んでいる。あわただしい時間の流れの中では、この風化を止めることは難しい。そういう意味でも事故を記録にとどめておくことは大切だ。

(はたなか みきお, 人間・環境学研究科第一経理掛)

Photo Album 5



比較的濡れの少ない資料については、
床に新聞紙・吸水紙を敷いて広げられた